

病理検査技師として働いて

～入職から３年間の私の想い～

◎宇田 紗矢香¹⁾

地方独立行政法人 桑名市総合医療センター¹⁾

【背景】

当院は、2018年に桑名西医療センター、桑名南医療センター、桑名東医療センターの３施設が統合され新病院となった。統合に伴い新たに様々な機器が導入され、自動化による作業効率の向上や術中迅速検査、免疫組織化学染色など、病理検査室の業務は拡大した。一方、施設設備や実施している検査業務内容の違いから、作業工程などに相違が生じていた。病理検査室は、桑名西医療センターから２名、桑名東医療センターから２名の４名で構成されており、病理検査技術の指導を受けていた。

【目的】

施設統合による課題と新人病理検査技師としての想いについて考察する。

【施設統合によって見えた課題】

病理組織学的検査の標本作製は、固定、切り出し、脱灰・脱脂、包埋、薄切、染色からなり、各工程で手技や考え方に相違が見られた。

病理細胞検査では、乳腺細胞診や膵腫瘍に対するROSE(rapid on-site cytologic evaluation)を実施している。細胞検査士間で細胞所見のとらえ方や報告内容に相違が見られた。

【新人病理検査技師としての私の想い】

入職時は、病理検査業務以外に当直業務など覚えることが多く大変だった。また、病理検査業務では肉体労働の場面もあり、責任を問われる業務が数多くあった。人見知りのため上司や先輩との関係性を築くまでに時間がかかった。病理検査業務では、多職種、他部署との関わりが多くコミュニケーション能力の必要性を感じた。

【課題の考察】

組織学的検査では、標本作製業務における作業工程の統一を図る為に、病理検査技術の相違を技師間で共有することが重要であり、より良い組織標本作製に繋がると考えられる。

細胞診検査では、判定困難症例や陽性症例の見直しを行い、細胞検査士間でディスカッションし共有することが重要であると考えられる。

【まとめ】

病理検査技術の相違は見られたが、技師間で相違点の共有をすることで、病理検査業務の標準化や精度管理に繋がる。新人技師として感じた想いを踏まえて、後輩へサポートや指導が出来る病理検査技師になりたい。

地方独立行政法人 桑名市総合医療センター 病理検査室 宇田紗矢香
連絡先：0594-22-1211